高津区おはなしアーカイブ

●内山　キク（うちやま　きく）さん

昭和３年生まれ　８８歳

川崎市高津区子母口在住

◆どんな子ども時代を

家族は、祖母、両親と５人兄弟で、一緒に暮らしていました。兄弟は、兄２人に姉１人、そして妹が１人です。

この辺りには、同級生が５人ほどいてよく遊びました。遊ぶといっても、下校後は家の野良仕事が待っていました。

蟹ヶ谷に内山家の畑がありましたから、家に帰って着替えて、出かけました。日曜も生徒同士が橘樹神社に集まって、掃除のあとは各々が帰って家の手伝いをしました。

親の仕事が農家ですから、子どもも、男女関係なくあたりまえに手伝いました。親たちは、朝は６時起き、７時には朝ご飯、そしてリヤカーを引いて野良弁当を持って畑に出ていくのです。

この辺は、田んぼの米以外には、畑で大根やサツマイモ、ホウレン草を作っていました。

今の子どもたちが家で勉強するのとは違い、当時の子どもたちの農家の手伝いも勉強と同じくらい大切なことでした。

また、いつの時代でも子どものケンカはありましたよ。歯型が相手のオデコについた男の子同士のケンカのときは、さすがに先生が謝りに来ました。そのとき親が先生に怒った理由が「戦争に行く息子の大事な体に傷がついては」というものでした。先生も親もそういう時代でしたね。

◆学生時代のお話を

私の頃は、幼稚園というものはありませんでした。せいぜい、昭和２４年生まれの長男のときには近所の子が１人通園するくらいでしたが、昭和２８年生まれの長女は入園しました。当時は幼稚園の先生が迎えに来てくれるような通園の仕方でしたね。

私は、昭和１１年に８歳で橘小学校に入学しました。１クラス４０人で男子の方が多かったと思います。

小学校の思い出で、影向寺（ようごうじ）から来ていた太った加藤先生が忘れられないです。輪になって踊るお遊戯を教えてくださったのですが、とてもお上手でした。

毎日持っていく弁当は、麦ご飯とおかずは鮭くらいなもんです。特別の日だけは、白いご飯が食べられましたね。

小学校卒業後、高等科で和裁を習いに行

こうと思ってました。しかし、兄の戦死でそれどころではなくなりました。

◆当時の町の様子は

昭和１４、５年頃のお祭りは、社務所に旅芸人が来たり、田舎芝居を見て楽しみました。青年団の劇はもっとあとです。

日々の買い物は祖母の親戚が今のスーパーのような乾物屋を経営していたのでそこを利用していました。苗字が「森」で屋号が「千倍屋」といいました。朝、御用聞きが注文を取りに来て、夕方に商品を届けてくれました。味噌や醤油は自宅で作ってましたから、砂糖や酒を頼みました。砂糖は、「５００モンメ」とかいう単位でしたね。

病院は最初は、柏木医院、そのあとに千年診療所、白坂医院、そして溝の口中央病院ができました。

交通の便は、私が１３歳の頃にはバスが通ってましたよ。畑のカボチャを親戚がいる砧まで、バスに乗って届けましたもの。この辺の最寄りの大きな駅は、武蔵新城駅ですが、まあバス便が発達しているので困りません。

私の家の前は尻手黒川通りです。この道路ができて、とにかくこの土地周辺の交通網が画期的に変わりましたねえ。この道路は切通しができて、整備されました。以前の我が家はこの山肌の上にありました。

◆戦争中に大変な思いを

農家ですから特に食べ物には不自由しませんでしたが、穀蔵は空襲で焼け、親戚の家に逃げました。近所ですっかり住まいが全焼した家がありましたから、それに比べたら、母屋が残ったうちは、助かったほうですね。

昭和２０年、１６歳で終戦を迎えました。玉音放送は、自宅の座敷で皆でラジオから聞きました。長兄の戦死はすでに公報でわかっていましたが、次兄も戦死と判明しました。次兄だけは、元気で帰ってきてくれるだろうと信じてましたから、家族は本当にがっかりして、残念でたまりませんでした。昭和１９年１１月に出征した次兄は、あと何ヶ月かで終戦だったのに・・・。戦死といっても、多分飢死か病死ではないかと思っています。戦後、この地域でも戦死だと思って葬式をあげたところ、抑留先からひょっこり帰還した人が何人かいたので、両親も「帰ってこないかなあ」といつも言っていました。さぞかし辛かったと思います。

まさか、兄２人が亡くなるとは思いませんから、姉も嫁に出てしまい、父も身体が弱くて畑仕事ができず、働き手は祖母、母、私、妹、兄嫁、兄の遺児の女の子だけでした。本当に女手だけで３年間は働きましたねぇ。結局、内山家を守るために、私が婿養子を取ることになりました。

◆お二人の馴れ初めは

２０歳のときに見合いをして、１ヶ月後にはあっというまに、結婚していました。私も当時はまったく、世間知らずでね(笑)。

夫の名は俊弘(としひろ)と言います。大正１１年４月生まれで私より７歳上です。小田中出身の田邊家の男４人の末っ子で、全員戦地から無事に帰還した兄弟たちでした。通信兵として北朝鮮に行っていたと聞いています。

まだ若かった兄嫁は、将来のためにも実家に帰し、兄の遺児の女の子は、私ら夫婦が育てることにしました。昔はこういう家が多かったのです。ある日、その女の子が夫のことを「お父ちゃん」と呼んだとき、本当に夫は喜んでいました。

男手のいないこの家に来てくれた夫でしたが、およそ婿養子らしくない、というか人の上に立てる人でした。南町内会長を１３年務め、交通安全や農協関係も皆のまとめ役でした。

◆どんな暮らしを

夫と２人で朝から晩までずっと、米や野菜作りで働きました。念願の男の子を頭に、２男１女に恵まれました。１０年間は専業農家でしたが、現金収入が減り、養豚を兼業としました。この子母口は養豚業が多かったのです。しかし、夫が５５歳頃、尻手黒川道路ができると養豚業を続けるのが難しくなってきました。このあたりに住居が増えてきたからです。富士通やＮＥＣや日本鋼管などができたために、その住居として県営や市営住宅建設がこの土地周辺で始まりました。人口が増え、田んぼが埋められ、養豚の匂いや糞尿など衛生上の問題がおこってきました。ここ子母口の２５，６年の変遷とも言えますね。

昔は農家は本家分家合わせて５０軒はありましたが、今は１軒もありません。

◆レストランを経営して

結局、子母口や橘地域の農家の人々は、アパート経営や駐車場を作り、不動産業に乗り出しました。

うちは、家の前に尻手黒川道路が通ったことをきっかけに、平成７年、ログハウスレストラン「カナディアン−１９」を開店しました。おかげさまで去年２０周年を迎えることができました。現在、息子から孫の男の子が継ぎました。嬉しいことです。

◆今、振り返って思うことは

そうねえ、もう苦労したことは全部忘れましたよ(笑)。婿養子を認めない時代によく、うちに来てくれたなあと夫には感謝です。覚えているのは、親戚の集まりのときに、夫の座る席のことで、親戚の長老が私に「なんで、新しい者が上席に座るのだ」と言われましたが、「上の人が夫をできた人だと認めたから、上席を勧められた」と言うと、「そうか」とうなづいてましたね。

小さい頃、親の手伝いでリヤカーを引きながら、パン屋さんの前を通るときに本当に食べたかったですねぇ。でも父が「また、今度な」と言うけれど、子ども心に「今度っていつなんだろうか」と、とても悲しかったのを覚えてます。今は嫁が出来立てのパンや美味しいものを買ってきては、仏壇に飾ってくれるのです。本当にありがたいことです。今が一番、幸せです。内山家のお墓は１５９０年に建立された「圓融寺」です。

◆寄り添うご両親を見守ってきたご子息から一言

ご長男の岩男（いわお)さん

親父は２７歳でこの地に来て、平成１４年に８０歳で一生を終えましたが、５３年間の間に何か、もっとやりたいことがあったのではないかと思います。

養豚を家業にするということは大変なことです。生き物を飼うということは、家族旅行などはありえませんし、行きたいと思ったこともありませんでした。

母も嫁に行きたかったと思いますが、男手のない暮らしの中で女手５人の野良仕事は大変だったと聞いています。母は婿養子を迎えることで家を守り抜きました。養豚場の跡地に開いた店は今、私の息子が継いでいます。「今あるのはおじいちゃん、おばあちゃんのおかげなんだよ」という私の気持ちは、いつも息子に伝えています。本当に両親には尊敬の念しかありません。

（平成２８年６月１０日取材）